

◎障子張り替えと、トイレの水漏れ、今日はこの二つの話を。最近、山で知りあった方、友人から紹介されいっしょに登っていたが、「家の修繕 できるよ なんでもやってあげるよ」と言われる。「ずっと 暇 時間が たっぷりあるから 大丈夫」と言われる。「トイレは見ないと わからない」「障子は 簡単だよ」と言われる。

◎家のこと、建物のこと、そんなこんなのほとんどがオレの手に負えない。「くぎを打つ 電球を替える ぐらいならできる」「水洗トイレの タンクの中のことは わからない 障子の 紙の 剥がし方は わからない」家も長らく暮らしているうちに、だんだんいろんなところが老朽化、朽ちていく。「まだ雨漏りはしていないが 屋根がねえ・・・」「壁がねえ・・・」「器具類がねえ・・・」

◎2階のアトリエのトイレは、2階を増築した時に新築で造ったものだが、設置してもう40年を超えている。「え こんなトイレ 見たことがない イナ そんな会社 知らん」といわれ、「これは アカンか 直らないかな」と思った。以前にも水道屋の友人がデッサンを描きに来ていて、「むむむ このトイレは・・・」と言っていた。イナの番外品の製品なのか、割れてきた便座の交換もできないという。別の友人が胃の検査のバリウムを垂れ流し、いささか汚れたままである。このトイレは直らないということで、後日交換かなと覚悟している。早急にしなければと思っているが、水洗トイレはバケツで水を流せば使用できるので、おっとり構えている。来客にはちとみっともないが、「災害時の訓練に 用便の際は バケツに水を汲んで・・・」とでもごまかそう。

◎「障子は 午後に行くので 午前中に 紙を 剥がして 乾かして」と言われた。障子紙と専用糊は購入していた。「ちょっと ネットの動画で 調べてみるか」最初に出てきたのが、“元大工の源さん”と言う方だった。まあ見事な太っ腹、ビヤ樽のような腹を見れば、「あれでは梁にも登れん 屋根の上にも立てん、狭い隙間もすりぬけられない ありゃ あかんで」と思う反面、「なかなかベテランの 大工さんだった のだのろう」と思わせる貫禄もある。最初は作業服姿だったが、さあ始めましょうと画面が切り替わったら、源さんと書かれたはっぴ姿、禿げ頭には粋な手ぬぐいを巻いている。江戸っ子なのか、こういう格好の変身はなかなか粋な演出で、大阪の職人はこうもカッコよくできない。宵越しのカネは持たねえ、なんて落語に出てくるような職人は江戸っ子で、関西の職人は派手さも粋さも少ないが、腕は、「勝ってるよ」と聞こえてきそう。

◎源さん、障子の一枚を庭先に持っていき、水道ホースのシャワーで派手に障子に水をかける。「えええ あんなに 水をかけるのか」と驚いた。オレも実際やってみて、水はたっぷりいる、絵を描く椀に水をたっぷり入れ、太い筆で棧の上をたっぷり濡らしていった。「水をかけて30分もおきゃあ 簡単に 紙が 剥がれる」という。これもおっしゃる通りきれいに剥がれていった。糊は障子専用のもの、障子の棧に盛り上がり気味に乗せていく。紙を上の方に置いてテープで仮止めし、くるくる下の方に転がしていく、これで貼れた。次に細めのカッターナイフで余分な紙をカットして、霧吹きをかけて乾けば出来上がり、「簡単なものだ 喜ばれるよ」と源さんが、動画の終わりのセリフ。オレも同じようにやった。上の方をテープで仮止めとなっているが、オレは製図の時の文鎮を重石代わりに紙の上に置いた、これはいいアイデアである。作業はややもたつき気味に、余分な紙のカットも美しくは切れないが、まがりなりに皺なく張れた。

◎源さんが言う、昔は暮れになるとどこの家も、畳を外に出して天日干し、障子や襖を張り替え、大掃除をして正月を迎えたもんだ。今はそんなことをする人もいなくなって、と言うのを聞き、そうだねえ、オレンチも子どもころは畳を全部外に出して大掃除なんてしていたもんだ。隣の家も向かいの家も同じようにやっていた風景を思い出す。まさにサザエさん一家である。

- ◎3月27日に続いて、今度はカタクリの花を見に行こうということになり小塩山を目指して歩いている。京都洛西の低い山だ。阪急電車：東向日駅で降り、8時26分発、南春日行きバスに乗った。地球温暖化現象で暑い熱いと騒がれているのに、3月は寒い日が続く、「ああ いいかげん 春よ 来い」と思っていたが、一週間ぐらい前、カレンダーが4月になったころから暖かくなってきた。そんなこんなで花の咲くのも遅れているとかで、我が家のポケの花も今満開である。「オレが 花を求めて 山に登るなど 恥ずかしくて 大きな声では言えないぞ なんて悪態を垂れながらも このあいだの ミツマタは 素晴らしかった 目の前に 白っぽいクリーム色が 広がって 感動だ」これは今も思っている、ぼちぼち桜が咲きだしているが、「桜 むむむ」とへそ曲がりなことを言っている。今回のカタクリも、「お 咲いてるね」と思ったが、琴線をゆるする感激はえられなかった、とまたまた、生意気を言っている。
- ◎バスを降り、「ええと どっちかな」と歩き出した。昨夜、国土地理院地図や、山の地図や、スマホの地図を首ったけに、コースを考えていた。南春日バス停を降りるのは2回目、前は金蔵寺から善峯寺経由でポンポン山方面に向かったが、今回は小塩山から森の案内所経由ポンポン山に向かう予定。
- ◎「ええと ええと」と歩きながら獣除けの扉を開け“小塩山”と書かれたかまぼこいた風案内板に沿って登っていった。スマホを見ると、昨夜入れたルートからは外れている。今歩いているルートは、地理院地図には載っていなかった。都会近くの低い里山に多い傾向だが、地元の人らがひよひよと近所の山に登るので、いくつものルートがある。「案内があるのだから 行けるだろう」と登った。すぐに着くかなと空を見上げたが、思いのほか斜面が続く、空が見えては次のひと山があり、そんなことを3回ぐらい繰り返して登っていった。横には車が走れる林道がある、淳和天皇陵が在るのでその保守点検のためかな。
- ◎古事記風に：おおはらののにしのみねのえのみささぎ：桓武の子：ネットでは、近所には長岡京が在り、と書かれている。長岡京は平安京に遷都する前の10年間の都。桓武天皇の命により平城京から移った。
- ◎カタクリの群生地とカラーのパンフがかかっている。小塩山には三か所あるらしい、「お ここだ ここだ」と中に入っていった。週日なのに係りの人が5.6人いて、皆さん嬉しそうに花を愛で、草を愛で、昆虫を愛で、鳥や獣を愛でている。二か所を時間をかけてぐるぐる見て回った、広い敷地にカタクリの花が咲いている。二か所目のところでは、70歳代80歳代の御大がニコニコ説明してくれる、最後に、「黒砂糖 なめて 帰って」といただいた。2年前の熊、キツネなどの獣類の夜の無人カメラの写真が並び、ギフチョウもいるらしい。「ミヤコアオイです ええ あれが」見たことがない花も見せてもらったが、花は小さく下の方に咲いていた。
- ◎小塩山：622M。天皇陵の後ろに標識があった。オレの地元の継体天皇陵のように、小屋があり門番の方が常駐しているのかと思ったが、ここは小屋もなく無人だった。前面は白い石コロが箒目に敷かれ、鉄の門扉があり、直系50Mぐらいの円墳は、50年100年前に積まれた石垣で囲まれていた。
- ◎ギフチョウ：黒白の蝶：春の女神：日本の固有種で日本列島の本州の里山に生息する。岐阜県で発見されその名がついたが、他府県にもいる。カンアオイが食草だと発見され、発見者に賞金が渡された。
- ◎森の案内所に下る途中の鉄塔の下で昼飯を食った。玄米飯に梅干し、野菜炒め、ウインナーソーセージの豪華食事、湯を沸かしコーヒーまでいただいた。タムシバ（田虫葉）の白い花、ハクモクレンより小ぶりの白い花がたくさん咲いている。「これだけ下ると また登り返しが しんどいね」森の案内所で休憩トイレも借りた。森の案内所は、30歳代に来たことがある、その時は身障者登山会の方がたと来てや僧の天ぷらを喰った。そのあと車で何度か来てそのあたりをぶらぶら歩いた。
- ◎森の案内所からポンポン山に向かった。“リョウビの丘”聞いたことがない名前、そんなあたりを通過して進んだ。「このあたりは 穏やかで いい感じのところだ」雑木の生えた森、ポコリンだらりんの山肌、ホワイトアウトでもしたら、雪が積もったら道がわからなくなるような丘の雰囲気尾根道、「空が見えるので もうすくかな」「あれれ だまされた もうひと山あるぞ」そんなもうひと山を三回ほど通過してポンポン山に着き、またまたコーヒータイム。前回同様8時間ぐらいのしんどい山行だった。

◎面白い催し2件の話。北野高校で毎月のようにトークリレーという催しがあり、同窓生の著名人を呼んで講演をしている。今回はNHKで放映された登山家の出演があるという。そんな眩しい若者の話はいかなものかな、行きたくもあり行きたくもなし、と思っていた。その講演の前に十三界限で壁画活動をしている人の壁画鑑賞ツアーがあるという、「なら 行ってみるべ」と出かけた。

12時過ぎに阪急十三駅東口集合とネットで知らせてあったが、行ってみると、かるた制作で共に苦労した永田さんが一人で花壇の縁に座っている。「やあ」「ひさしぶり」なんて言い合いしばらく花壇の縁に腰掛けて待っていると20人ぐらいの人が集まり、法被を着て旗を持った永田さんを先頭に歩き出した。

◎「お これか」「なかなかうまいもんだ」「マスキングと 吹付塗料かな」「外壁なので 耐久性は弱いだろうね」20点ほど十三界限を見て回った、2階3階程度の古びた建物の壁に壁画が描かれている。一点一点のデザイン コンセプト 主張、描き方が違うので、ひとりの人の作品と言うより、デザイナー感覚で響いたモチーフをこね回しこなして作品にしているのか、提供者の作品を壁に写しているのか、そこら辺のところはわからない。なかには、「これは ちょっと 程度が低すぎるな」というものもあった。

◎バキバキ君は、京都芸大出身の作家、十三界限に住まいし、壁画制作活動を盛んにやっている。この企画力、事業としてまとめ継続する力、どんな模様も、どんな絵も、こなしていく柔軟さ、これらはすごいね、うらやましいね、オレにはこんな発想も企画も浮かんでこなかった。とはいえ何点か若いころに壁画を描いた思い出がある。ただ、彼が使っている模様が、北野のマークと似ているので、それをデザインして使っているものだと思っていたが、これは彼のオリジナル模様だそうだ、紛らわしいね。

◎絵の具やペンキのことを調べたが、「無機塗料なら20年ぐらいは持つのでは」となっている。下地の処理をしないといけないよとも解説してある。足場があっても5メートル以上の高さはぞっとする。

◎野村良太 1994年生まれ：彼も壁画鑑賞ツアーに同行していたので、「おお 彼か」オレより背が高く、30歳という若さはきびきび眩しく行動していた。

北海道分水嶺・積雪期単独縦走：宗谷岬から襟裳岬まで670キロ63日間：という標題である。植村直紀冒険賞受賞。職業は山岳ガイドで、田中陽希の3日間バックアップもしたそうだ。

◎田中陽希：1983年生まれ：日本三百名山一筆書き：Great Travers：鹿児島屋久島から北海道利尻島まで徒歩やスキー、水路はシーカヤックで、宿泊はテント泊もあるが、宿屋も使っている。

◎野村良太君は、北海道の分水嶺を、いくつかに分け走破した先達の影響を受け、ならば一気に行ってみようと考えたそうだ。時期はいつがいいか、これは厳しいけれど積雪期の方が歩きやすいと判断。宗谷岬と襟裳岬、どちらから出発するのがいいか、一番険しい日高山脈を縦走する際、北斜面を登るほうが雪が固まって登りやすい、南斜面を登ると雪が崩れラッセル続きになるというので、北から出発した。何日かかるか、距離と自分の速度を考え、50日プラス予備日15日をたして65日の予定にした。食糧計画は、途中の避難小屋四か所にデポした。テントのポールが一本斜面を滑落、四日後に仲間のサポートで回復した。デポ食糧がネズミ被害にあい、仲間のサポートで回復した。

◎NHKの放映予約があったので、goproカメラを持参して撮影したそうだ。携帯電話の電池、カメラの電池もサポートを受けたそうだ。中島健郎のように、ドローンを活用すると面白いだろうね。

◎ふんわりの新雪の積もった狭い尾根、スキーにシールを張って進む、こけたら一巻の終わりだそうだ。同じ尾根道を顔ぐらいあるヒグマの足跡があり、それに沿って歩くと雪が締まっていて歩きやすかったそうだ。ウサギや狐の足跡は、図に乗ると雪庇を踏み外すので要注意。

◎彼の話を聞きながら、7日間の大嶺奥駆同を思い出した。67歳の5月、オレはふらふらになりながら熊野大社に到着、バスに乗ってビールを開けた時の感激は忘れられない。

- ◎またまたのポンポン山、今日は久しぶりの山仲間、相澤・番匠・三宅・難波・青西・岡村の6人。三宅さんは遠方の南山城村からやってくるので、「8時は無理 10時頃なら」という。ならば森の案内所で11時頃と提案して、住所を送った。高槻の続きだから、住所は高槻かと思っていたが、京都市である。なんと、ポンポン山も京都市である。三宅さんとはその案内所で会うことにした。岡村車に5人乗って茨木を出発、30分ほどで500円前払いの本山寺の駐車場に止め、登山の用意をし、9時に歩きだした。ここまでやってくる道中、どこもかしこも桜の花が咲き誇り、「わ きれい」という歓声もしぼんでいき、「また 桜」「桜 もういいよ」「もう食傷気味だよ」と桜様に対して大変失礼な発言がオレのどこかから発せられ、不敬のいたりではあるが、たかが桜じゃないかである。
- ◎10:45: ポンポン山にやって来た。空は青いが遠くの景色が霞んでいる。朝は冷えびえしていたが、陽が高くなるにつれ暖かく、シャツ一枚で歩いている。三宅さんとは11時に森の案内所で会おうと言っていたが、いつも度々連絡のある彼から連絡がない、来ているのか、これなくなったのかわからない。皆さん足が遅く、休憩ばかり取るので足が進まない、焦りはするけど、こればかりは、である。
- ◎ポンポン山から森の案内所へ向かってすぐあたりから魅力的な山肌が続く、ダラリンたらりん、ポコリンと穏やかな尾根道が続く、リョービの丘と言う広場、「ここでコーヒーにしましょう」皆さんゆったりしたもので、「カタクリが待ってるよ 急がねば」「カタクリより コーヒー」「こしお じゃなく こしお だよ」オレは、「こしおやま じゅんなてんのうりょう」と呼んでいた。水を2リットル、ガスにコンロとヤカンをザックに入れてきた。
- ◎コーヒーを飲みながら眩しい陽を見ていると、先日、名を教わった、タムシバの白い花があちらこちらに咲いている。地面にも白い花びらが散らばっている。桜の花びらを、タムシバの花びらを、紫色のサツキの花びらを、そんな花びら絨毯の上を踏んで歩く、華やかな山行である。
- ◎電波の悪い中で電話がかかってきたが上手く聞き取れない、どうも森の案内所で待っているようだ。「さあ 急ぎましょう」と急いだ。12:30 森の案内所で会い、少し上の展望台で昼飯を食った。恒例のバナナと大福饅頭をいただいた。
- ◎「白い カタクリ」ネットで調べると、白い花が咲くのは、相当確率が低くめったにお目にかかれないそうだ。前回来た時に係りの方が、「まだ咲いていませんが これが 白です」と教えてくれていたので、白いカタクリを目指して目をくりくりしていた。「あった 白だ やった」である。ネットでは堂々と写真が出ているが、オレが写したものは、目の前で見た“ほんまもん”とは口幅ったいが、うれしいかぎり。そのあとぐるりと一周して終わって帰ろうとしたところで、「し し〜 ぎふちょう そこ みえるか あの花の向こう」「え 見えない え」「どこ・・・」「あの花の 向こう あっちの」いた、蝶がいた、止まっている。オレは前回の山行のあと、帰ってネット図鑑を見て、アゲハチョウ科と出ていたので、てっきり、いつも目にするアゲハチョウぐらいの大きさと思い込んでいたが、「え 小さいね」と思わず言ってしまうほど、畑をひらひらする“モンシロチョウ”ぐらいの大きさ、しかも白黒の保護色、なんと目に入ってきた。
- ◎今日、同道した皆さん、山に登るのは、早い人で3か月ぶり、半年ぶり、1年ぶりという方々で歩みが遅い。「今回は 駐車場から カタクリを 往復」と予定していたが、ポンポン山に来た時点で、「カタクリは 見られないかも それまでに 引き返さないと いけないかも」と考えだし、歩いている山の中で電話がかかり、森の案内所で待っているという。森の案内所で全員が揃い昼飯を食い終わり、1時過ぎに、カタクリ園がある小塩山に向かって登り始めた。その時点で、その時間なので、「小塩山まで行って じっくり カタクリを見て森の案内所に帰ってきたら 4時頃になる」三宅さんの車でオレだけ乗せてもらって、本山寺の駐車場まで行き、オレはオレの車でまたここまで戻ってくる。ここ、森の案内所まで戻って来て4人の方を乗せて茨木に帰りたい。「それでは オレは 高槻から分かれて 南山城村に帰る」と三宅さんはいう、「今日は 飲むのをやめて 次回 飲みましょう」というように動くことにした。車が2台あってラッキーなことだった。

- ◎今、北小松の駅を出て歩いております。いつもの通り列車は9時10分前に着いた、ベンチの前にザックを置き、靴ひもを締め、登山届を出し、メールを送った。今日はHさんとMさんの3人で山行予定だった。2,3日前から乗車する電車の時刻表をもらっていたので、「JR 高槻駅で合流します」「その新快速電車は 京都駅で前4両が 湖西線 後ろが 東海道線 切り離す可能性があるので 5両目 前に 乗ります」なんと高槻駅には30分も前に着きベンチに座って待っていた。ドアが開き車内に入って見渡しても姿は見えない。10分ほどして、「どこにいますか」「5両目 前にいます」しばらくして、「乗る電車を間違えた 北小松から 山に出発してください」あれれ、同道者がいると思ったが、またまたソロ登山になった、山で会うのはなかなか難しい、「ま ここは 勝手知った山 3月11日は雪で ラッセルで 撤退 3月16日は 同道の方が雪支度をされていないので 近所の低い山 そんなこんなの リベンジだ」
- ◎車窓からの山なみは上の方が白い雲に隠れて見えなかったが、登り始めると多少霞んではいるがまっさおな青空だ。風もなく穏やかな気候、裏起毛のシャツ一枚で暑くもなし寒くもなし。家を出るときは暖かいセーターを着込んで電車に乗っていたが、そのセーターは駅で脱ぎザックに入れた。
- ◎10:15 涼峠を出発、森林帯の中、ヤケ山を越え、「さあ これから 尾根道の登りだ」そこで二本目の休憩を取って、持参のコーラを飲んでいた。ゆっくり登っている方がいる、少し話をしてお年を聞くと「三つ上の 80歳です ここはきついねえ」その方後々、時間をかけて釈迦岳に来られ 同じ道を降りたが、下山速度は飛ぶように早い。その速さを見て、若いころはさぞ登りもブイブイ言わせておられたのかなと想像。
- ◎そうこうしているうちに、「お 仲間が来た」HさんとMさん、大汗をかいて大速力で登ってきた。25分遅く着いた電車だそうだけど、二本目で追いつくとはびっくりの速度である。ただ、この“びっくり”が後に尾を引き、お一人は膝が痛くなりかける、お一人は低血圧ギミになり釈迦岳のてっぺんで1時間ほど休まれた。
- ◎昨夜は、「明日はきつい山だ オレの定点観測の山だ」と思いながら10時半ごろに寝た、5時半ごろに目覚めた、「ちょい 早すぎるな」とおもいつつ、歯を磨き服装をととのえ、階下で朝飯を食いながら弁当を作った。洗濯も済ませ時間があつたので干した。少し早いが自転車で出かけ、茨木駅から高槻駅へ、約束の新快速に乗るためにベンチに座って30分も待つことになった。
- ◎時刻表を調べてみると、週日は同じ電車がダイヤ改正で無くなっている。新快速は高槻から北小松まで50分で突っ走るが、茨木から乗るモノにとっては、30分ぐらいのロスが出る。ならば新快速をあきらめ京都で乗り換えるだけなら、茨木、北小松間が、70分80分ぐらいでいけるじゃないか、と発言を発見、新快速にこだわることはないんだと発見。以後この新快速はやめようと思った。ただ帰りは新快速が早いね。
- ◎一か月前の雪では、ヤケ山でアイゼンを着け時計を見たら12時近い、1時間遅れているので驚いた。釈迦岳まで30分もかからないというところまで登ってきたが、時間が2時半を過ぎているので撤退を決めた。たった30分の距離だが、1時間以上かかりそうだった、もうフラフラだった、帰りの体力を考えた。
- ◎尾根道の途中でみかんをいただいた。美味いみかんで皮ごとぱくりと食べた。山は果物がいい、とおっしゃる。「夏は スイカ なかみを 刻んで 持ってくる」「メロンはね 割って スプーンで 終わったら それでワインを 飲む」何とも豪快な話である。
- ◎ショウジョウバカマがあちこちに咲いている。「これがそうなのか 山の花だね」ピンクがかった、紫がかったか細い花だ。猩々：ヒヒ
- ◎猩々能がある：高風という男がいた。高風は夢をみた。「市で酒を売れば儲かる」その通りにするとどんどん売れた。いつも買う客がいて、名を尋ねると海に棲む猩々だという。高風は酒をもって海に行き待った。赤い顔の猩々が現れ、会えたことを喜び酒を飲み舞った。心の素直な高風を称え酒壺を贈った。
- ◎帰り道小さいヤマカカシが草の中でひよろひよろ逃げていく光を感じた。4時頃にイン谷口に下りてきた。「バスがあるかな」話しているとバスがリターンのために向かってきた。「おお あれに乗って帰りましょう 乗り遅れると 1時間の歩きですよ」6時前に家に帰り着いた。

- ◎10人ぐらいの皆さんに連れて行ってもらって葛城山を登っている。久宝寺駅で3人乗せ出発、あとの方は別の車でもう先行しているという。
- ◎「水越峠に向かう 千早赤阪村に向かう」これを聞いた時オレの頭の中の地図が、「あれれ」と違和感を感じたが、この違和感は頭に中の歪んだ地図のおかげ、これを具体的に人様に説明するのも難しい。
- ◎地図の読めない男であるオレ、いまあらためて地図を見て、北に向かって八尾、藤井寺、富田林、河内長野、橋本、高野山と連なっている、まっすぐ北だ。今までのオレの頭の中の地図は、方角も点在する街も、まっすぐ北ではなくしかも蛇行している。帰りも天王寺に向かったが、「まっすぐ行けば天王寺だ」というのが信じられなかった。地図を見ると309号線は河内長野から北北西に向かい、松原市を通過して天王寺に近づく寸法だ。
- ◎水越峠手前のあたりに車が何台も止まっている、週日というのに人気の登山口ようだ。沢沿いを登っていく、綺麗な水がジャバジャバ流れている、沢沿いが終わって次は階段が続く、エンヤコラ登っていく。登りが2時間ぐらいの軽い山だというけれど、それなりにしんどい。
- ◎先日の北海道南北縦走の講演の中で、ハイカロリーの保存食の話が出ていた。ペミカン：ネイチブアメリカンが考え出した高カロリー保存食：バイソンや鹿の干し肉、ドライフルーツ、ナッツなどを混ぜ獣脂で硬め密封すると長期保存できるという。この話をすると、「ペニカン知ってるよ 今どきそんなもの使わない もっといいもの たくさん売ってるよ」という。30歳の彼が60日間の積雪期北海道南北縦走山行で、ペミカンを作って4か所の小屋にデポしておいたらしい。
- ◎ショウジョウバカマが一面に咲いている。上の方に行くとカタクリがこれまた一面に咲いている。「おきれいな」と思うが先日来ポンポン山でこれらを見ているので、「あ そう」とそげない。
- ◎ここは15年ぐらい前に、「ツツジを見に行こう」と別の仲間とケーブルで上がりそこらあたりを散策、一面のツツジの花に満足した。そのツツジが、まだこの季節では枝だけの木があるだけだった。
- ◎オレの勘違いが続くけれど、水越峠と竹内街道がごっちゃになっている。竹内街道は堺市と葛城市を東西に結ぶ道、水越峠は大阪側の千早赤阪村と大和側は御所市の間にある。
- ◎水越峠：江戸時代から大和国と河内国の水争いがあった。農業用水として水は必需品であった。峠の両側に分水（みまくり）神社がある。
  
- ◎トイレ：トイレが入れ替わった、2階アトリエのトイレが新品になった、感激である。前のトイレはアトリエを新築した時のモノでもう45年近く経っている。便座にひびが入り、それが進み、ノリと布で補強していたがまことに格好が悪い。「便座だけ 売ってないの？」というのが始まりだった。わがアトリエで毎月裸婦デッサン会をしていた、そこに別々に水道屋さんと日曜大工屋さんがいた。まず水道屋さんが新便座、今風便座をあげると言ってくれ、期待して待ったが、「この便器は あうものがない」という。せっかく楽しみにしていたが、なにがだめで、どうダメなのかいまだ不明。それから水漏れが始まり、日曜大工屋さんがこれは部品を替えたら一発で直るとおっしゃって部品を替えた当座は直っていたが、2.3年経ってまた漏れ出した。今回も新たに知り合った方が、「パッキンを替えれば直るよ」と半日潰して2回来てくれたが直らなかった。近所のホームセンターでパッキンを買ったが、2回目は5000円までぐらいの部品なので、係りの人に聞いてみた。製品番号がわからないと何とも申し上げられない、といわれ、3回目のその日は引き上げた。「便器そのものを交換するといくらぐらい」「今はお高くなりまして ええと 8万ぐらいからです」「え そんなに安いのか」そのあと数日して8万円の方に、「交換お願い」と便器交換を注文した。すぐに職人さんがやって来て、「既存は伊那製陶で 今回もリナックスしか寸法が合わない 製品が9万円 フランジが1万円 消費税入れ12万円です」「お願い やって」「それじゃ 即 製品注文します」数日して、「木曜日 12時から1時の間に 工事に行きます」工事は2時間ぐらいで完成。もっとちゃっちいものかと思っただが、今風のコンセントを指せば、湯が出る暖かい便座という立派な代物ができあがった。もっと早くやればよかったと反省。

- ◎9:00 登山開始。鎖が張ってある林道を50メートルほど行ったあたりから、左の斜面を登っていく、与助谷から若狭駒ヶ岳へ行く、軽いコースである。車に自転車を積んで、ここに自転車を置き、池原口まで戻って、池原口から反時計回りに、与助谷を下るルートも考えたが、今日は若狭駒ヶ岳ピストンと決めた。
- ◎今まで山計画、車計画はネットで簡単にやっていたが、最近になって同じネットの仕組みが変わったようで上手くいかない。「あれれ サイトの様子が変わった・・・？」無料でやっていたものが有料になり、「ただでは教えてやれんぞ」ということかな。それでもめげずにがんばって調べると、茨木から朽木麻生までおおよそ100キロ、高速料金は1250円である。半年前に一か月ほどかけ、胃が痛くなるほど悩んで購入した車、前のアコードに比べ燃費はいい、前ほどはガソリンを喰わないが、1リッターで何キロ走るのがまだ検証していない。前のが10キロならこの車は12キロぐらいかな。朽木に行くには6000円弱ほどの交通費になるだろう。
- ◎30分ほど登ってくると針葉樹植林地帯と広葉樹の雑木地帯が混在する。植林地帯に重機が入り、道を作って伐採の工事をしている。今時の林業は山の斜面に重機が入ってまずトラックが通れる作業用道を作り、チェーンソーで材木を伐り運んでいく、工事現場さながらである。
- ◎でっかいブナが出始めた、高島トレイル、この江若尾根のブナは美しい、ここを歩く、ブナの木を見る、いいねえ。急に暖かくなり枝だけの樹から若葉色の小さい葉が出始めている、萌えている。萌えていると言ったが、遠くから斜面を見ると、樹々のひとつひとつが、白っぽく、ピンクっぽく、黄色っぽくうっすらパステルトーン、冬の間のグレーからほんのり薄化粧をしているように見える。あれが萌えるというのかな、それとも若草色の葉が出始めたのを萌えるというのかな。オレは、新芽が膨らみ薄っすら色づきほんのり薄化粧の方に手を挙げるね。
- ◎70分ぐらいで乗越に到着、与助谷山の小さな標識がある。与助谷という名前だが、谷筋ではなくずっと尾根道、このルートを元ちゃんから教えてもらって、「こんなに登りやすいコース まっすぐ直登で迷わない 谷がないのでヒルがない」と喜んでいる。それ以外の木地村から高島トレイルに登る道は、曲がりくねり、谷やら尾根やら、這いのぼるところもあって好きではない。今日の天気は青空が出ているがうすら晴れ、午後からは崩れるという。もうすぐ乗越だというあたり、ブナの樹がではじめ、上の方に来ると、ブナばかり、いいねえ、綺麗ねえ、力強いねえと嬉しがっている。東北の白神山地には行ったことがないが、ブナの原生林があるらしい、多分いいんだろうね。
- ◎11時半ごろに若狭駒ヶ岳にやって来た、「ここで飯だ 少し早いが 喰うぞおお」乗越に着いた時に単独の女性が駒方面に歩いていった。駒に着いた時に、福井側から登ってきた若い男性が登って来て、「熊川の方から登ってきた」といって少し休んで横切って行った。苔もいい、綺麗な緑みどりではないけれど、少し褐色系を帯びた色がつやつやしている、これまたよしである。
- ◎1時に与助谷に帰ってきた。この乗越のたらしん広場、でかいブナが20メートルぐらいの間隔を開けて、どんだんと立っている。木肌は黒や白や緑という色が迷彩模様が付いている。
- ◎与助谷を下っていて、「あ この樹」とオレの中で歓声が上がる。右側の斜面にへばりつくように2本の樹、下の樹の方がより大きい、「前回も見た 何度見てもいい なんの樹 かな」斜面を転げ落ちたら大変だと思いつつ近づいた、触れた、満足なり。
- ◎軸がぐるぐるとぐるを巻いたような形の面白い樹がある、今日は2本見た。多分彼らまだ幼く小さな時分に、吹雪で傾き倒れ、春になれば起き上がり、そんなことを2.3回繰り返すうちにトグロができ、そのまま大きくなって、ケタイな樹に成長したのではないのかな。
- ◎「岡村 おまえさん 樹の写真が好きだな でっかい樹が」「そらあ 面白いぞ 歪み 汚れ 穢れ いいぞお」高島トレイルは滋賀県と福井県の境にある、冬は雪が降り風もきついだろう。そんな猛吹雪の中で生き抜いてきてる樹々たちは、根を अच्छこちに食い込ませ、幹はねじれ、木肌は汚れ、下の方は苔むしているがその姿が格好いい、粋だね、魅力的だね。

修行僧至越中立山会少女語第七くしゅぎょうのそう たちやまにいたりて わかきをむなにあふ こと>

◎今は昔、越中の国〇〇郡に立山という所がある。昔からこの山には地獄があると伝えている。その様子を言えば、はるかに遠く広々とした高原があって、谷あいには百千もの湧湯があり、深い穴の中から熱湯が沸き出している。岩石が穴をおおっているが、湯が沸騰して岩石の隙間からほとぼしると、その大きな大岩石が動揺する。熱気充満してそばに近寄ると身の毛がよだつほどである。また、その高原の奥の方に大きな火の柱があり、常に焼けて燃え上っている。また、ここには高い山があり、帝釈嶽と名付けられている。そこは帝釈天や地獄の冥官がお集まりになり、衆生の善悪の行いを協議して決めるところだといわれている。この高原の地獄の谷に大きな滝がある。高さは十余丈、これは勝妙の滝と名付けられ、白い布を張ったようである。

◎称名の滝：千年前は勝妙の滝といったのかな：何度も行った立山だが、20年も前になるだろうかバスに乗らずに立山の駐車場まで下ろうと、澤山さんと歩いた。室堂のあたりは夏でも雪が残っているような涼しさだったが、どんどん下って、「暑い 不快」と叫びながらこの称名の滝あたりから車道に出た。滝のしぶきが気持ちよかったと、覚えているような、いないような・・・この長い下りの道中は、ただただ坂を下るだけ、「あまり楽しい道ではないな」という記憶しかない。

◎立山の方に入るには、富山地方鉄道：立山駅で降りる。車の場合はそばに大きな無料駐車場がある。立山駅から美女平までケーブルカーに乗る。美女平から高原バスで室堂まで行く。高原バスが走るあたりは豪雪地帯で5月のGWころまでに除雪車で道を作る、この時の壁、10メートルぐらいの両側の壁がいつも話題に、ニュースの画像が大きく写っていた。

◎万葉時代より、立山は、富士山、白山とともに、日本三霊山として山岳信仰の対象となっていた。人々は白衣菅笠、わらじ、金剛杖といういでたちで、修験者として、立山禪定を行った。熱湯吹き出す地獄谷を見て、奈落の世界を感じ、極楽浄土に夢をはせた。

◎広く広々とした高原：百千もの湧湯：湯が沸騰してほとぼしる：熱気が充満している：火の柱があり燃え上っている：白い布を張ったような滝：立山はオレが知っている北アルプスの中で、北西方面にある、富山駅に近い、剣岳や薬師岳の隣にある。室堂ターミナルでバスを降りるとそこは標高 2500 メーターぐらいの高地、一挙に山岳地帯に上がってくる。1時間ぐらい荷を担いで歩けば雷鳥沢ヒュッテのテント場に着く。また別の時は、荷を背負って雷鳥沢を登り剣御前小舎、そこを少し下ると、剣沢小屋のテント場がある。剣御前付近を登りきったところから後ろを振り向けば、東南東方面、バスで登ってきた高原地帯、雲海が流れながれて富山方面に大河のように落ち込んでいた風景が印象的だった。毒ガスが出る噴出物があるのか立ち入り禁止の場所もある。風呂に無関心なオレも小屋の熱い風呂に入ったことがある。

◎ところで、三井寺にいる僧が仏道修行をするために諸所の霊場に参詣しては難行苦行を続けていたが、その越中の立山に参詣に来た。地獄の原に行きあちらこちらを見ていると、山の中にひとりの女がいた。年若く、まだ二十歳に満たぬくらいである。僧はその女を見て恐怖の念を抱いた。「これは鬼神ではないだろうか、こんな、人もいない山中に、こういう女が現れるとは」

◎女は、「私は鬼神ではありません 聞いてください」僧が立ち止まって聞くと、近江の国蒲生郡に住んでいたものです。死後、この小地獄に落ち、耐え難い苦しみを受けています。どうかあなたの御慈悲で、私の両親に伝えてもらいたいです。私のために法華経を書写供養して、わたしの苦しみを救うように話してください。

◎僧は近江の国蒲生郡にその両親を探し当て、両親に死んだ娘の頼みを伝えた。父母は早速、法華経を書写供養し奉った。その後父母の夢に娘が現れた。娘は父母に合掌して、「法華経の威力と 観音のお助けにより 立山の地獄から出て 忉利天に生まれることになりました」と告げた。

◎今昔物語の大半は、仏教賛歌の話が多い。どこかの寺院の僧が執筆者でないのかな、と聞いたことがある。